

## 平成20年度 文化庁購入文化財一覧

### 【絵画】

- 1 しほんちやくしよくやつはしず 紙本著色八橋図 おがたけんざんひつ 尾形乾山筆 一幅



重要文化財（昭和27年7月19日指定）  
江戸時代  
28.4×36.6cm

尾形光琳の弟で、絵師・陶工として江戸時代中期に活躍した乾山（1663～1743）の作品。「伊勢物語」東下りの段に取材した画題で、在原業平が京から東国へ下る際に燕子花（カキツバタ）の名所として知られる八橋を通ったとされることによる。簡略な筆致で板橋を描き、その周囲に群青と緑青で燕子花を描く。余白には和歌などを散らし書きする。小品ながら、陶工でもあった乾山の清新で洒脱な作風を示す作品である。

- 2 しほんちやくしよくかんきてんれいげんき 紙本著色歎喜天靈験記 でんてんじんえんぎ（伝天神縁起） 二巻



重要文化財（昭和9年1月30日指定）  
鎌倉時代  
甲巻 29.8×956.8cm  
乙巻 29.9×699.6cm

平安時代前期の天台宗の高僧、法性房尊意が護持した歎喜天像の靈験と造立の由来を記す縁起絵巻。太宰府に左遷された菅原道真にまつわる説話が多く含まれることにより「異本天神縁起」とも称される。尊意は歎喜天に祈念することにより道真の怨霊や平将門らの調伏に力を発揮する。また、入唐僧慈覚大師円仁が歎喜天を信仰した因縁を説く。

## 【彫刻】

### 3 もくぞうたいちょうおよびにぎょうじゃざぞう 木造泰澄及二行者坐像

三軀



重要文化財（平成15年5月29日指定）

泰澄 44.0cm

きよさだ  
浄定行者 28.2cm

ふせ  
臥行者 26.2cm

日本の三名山の一つ、白山の開創者と伝えられる奈良時代の僧、泰澄とその二人の弟子の像。泰澄は越知山（福井県丹生郡）で修行を積んだ後白山を開き、晩年は越知山に帰ったという。本像は越知山の越知神社の別当寺、大谷寺に伝来し、泰澄像の像内墨書より明応2年（1493）に造立され、大永8年（1528）に修理されたことが知られる。泰澄像を代表する作例である。

### 4 もくぞうふどうみょうおうりゅうぞう むろどうあんち 木造不動明王立像（室堂安置）

一軀

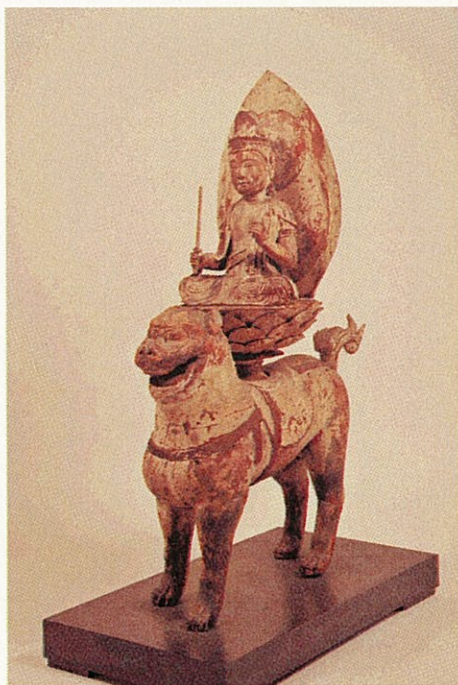


重要文化財（昭和16年11月6日指定）

木造 彩色

像高 93.6cm

白山の開創者と伝えられる泰澄にゆかりの深い古刹、大谷寺に伝えられた不動明王像。頭部を小さめにした腰高の体形、怒りの中にも穏やかさを示す表情、浅く整えられた衣文表現など、優美な作風を示し、平安時代後期の典型的な不動明王像の一例として貴重である。頭軀の幹部から岩座までを通して針葉樹の一材から彫出し、前後に割矧ぎ、内刳りの上、割首とするが、本軀と岩座を共木とする構造は古式で、他にあまり類例を見ない点も注目される。



重要文化財（明治42年9月21日指定）  
平安時代  
木造 彩色  
像高 本躰45.5cm

平安時代中期に遡る像で、獅子に乗る姿を表した文殊菩薩像としては古例に属する。本躰は両手上膊及び両脚を含んで一材から彫出し、衣文の彫りにも力強さがある。また悠然と歩行する獅子の姿にも精彩があり、騎獅文殊像の優品として貴重である。彩色の剥落は著しいが、本躰のみならず獅子、蓮華座、光背に後補部分が少ない点も賞される。本像が伝えられた額安寺は、額田氏の氏寺として創建されたと考えられる古刹で、鎌倉時代には真言律宗の僧として活躍した忍性（1217～1303）が出家した寺としても著名である。忍性は熱心な文殊信仰者で、その思想に基いて慈善救済事業を行ったことでも知られるが、本像は忍性ゆかりの寺に伝えられた文殊菩薩の古像としても重要である。

【工芸品】

6 なべしまいろえけしもんさら  
鍋島色絵芥子文皿

一枚



江戸時代（17世紀末～18世紀初め）

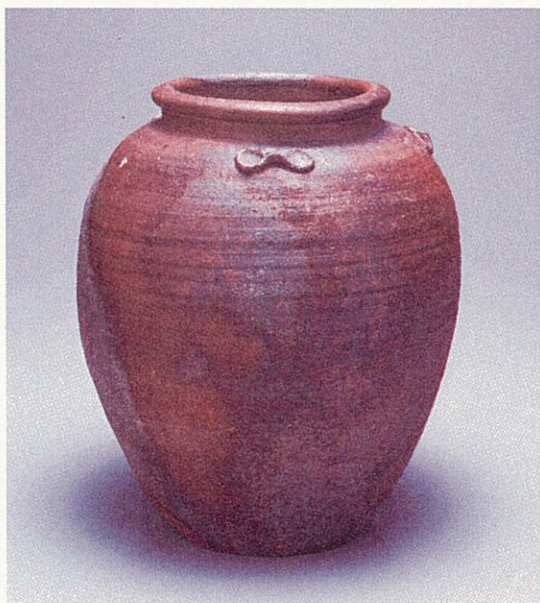
高さ 5.5cm

口径 19.3cm

高台径 10.8cm

芥子を染付の輪郭線を用いて赤・緑・黄の上絵具を用いて賦彩した中型（七寸）の皿である。芥子の文様は周縁に沿って展開し中央に白の余白を残し、右上を解放した構図としている。高台にはやや短い櫛歯文を廻らし、外側面の三方には染付で花唐草文を描いている。

この皿のように中央に白抜きの余白をとし、周縁の一部を開放とする文様配置は鍋島にはよく見られる構図の一つである。鍋島藩窯色絵皿の典型的な作風を示す作品の一つとして貴重である。



桃山時代（16世紀末～17世紀初め）

高さ 27.5cm

口径 15.5cm

胴径 23.5cm

底径 13.5cm

肩の上部三方に粘土紐を用いた横耳をつけた三耳壺で、胴部は粘土紐を巻き上げ全体に轆轤整形し、底部は粘土板作りの平底とする。胴部は裾から緩やかに丸みを持ってやや膨れて立ち上がり方は穏やかな撫で肩となる。口頸部は極短く立ち上がり、口辺は端部が外に開き丸く仕上げる。胴の中程には轆轤目が残され、胴下部には篋削りを施す。器表は備前ならではの赤褐色を呈し一部には暗黄褐色の自然釉が薄く掛かる。

本壺は中世において日常的な貯蔵容器である壺の肩三方に耳をつけた三耳壺であるが、本品よりも一回り小さな壺は備前においては俗に「種壺水指」と呼ばれ、いわゆる茶陶の中で水指に見たてられたもので、本三耳壺も同様に水指として用いられた可能性もある。桃山時代の備前の典型的な作風を示す三耳壺の代表的な作品である。

8 あきくさきりもんまきえたな  
秋草桐紋蒔絵棚

一基



桃山時代（17世紀）

高さ 70.8cm

縦 38.8cm

横 95.0cm

黒漆地に秋草文様を自由に描き、菊・桐紋を散らした意匠を施した大型の棚で、桃山時代に流行したいわゆる高台寺蒔絵の典型的な特徴を備えた作品である。漆工技法としては、簡略的な平蒔絵を用いて表現されているが、棚板や側板、さらには袋の背面に至るまで、厨子全面にわたって種々の秋草の文様がくまなく施されており、総体として豪華な雰囲気を示している。

桃山時代を代表する工芸意匠である高台寺蒔絵として典型的な秋草文様をあしらった優品の一つである。

9 のうしょうぞくろい  
能装束類

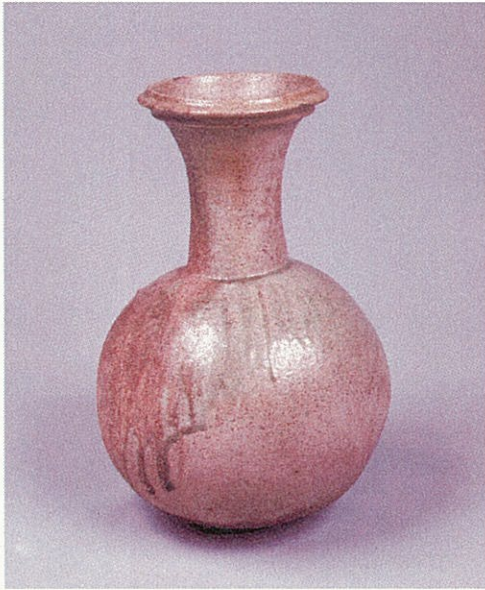
二百九十五点



桃山時代～昭和時代（16世紀～20世紀）

能楽に用いられる装束の一括資料である。本資料には、唐織、縫箔、摺箔、厚板、熨斗目、着付などの小袖もののほか、長絹、舞衣、水衣、狩衣、法被、側次、直垂、素襖の広袖もの、袴類、小物類で構成される。桃山時代、江戸時代初期の貴重な装束をはじめ、18世紀から19世紀のものを中心とする。

本資料は、国内の能装束コレクションの中でも有数のコレクションの一つである。多種多様な能装束に様々な裂が用いられ、さらに長期にわたる各年代の装束が網羅されていることから、能装束の種別による特徴、時代的変遷を知るだけでなく、染織史的観点からも重要な一括資料である。



飛鳥時代（7世紀）  
高さ 30.5cm  
口径 11.3cm  
胴径 19.6cm  
胴最大幅 20.6cm

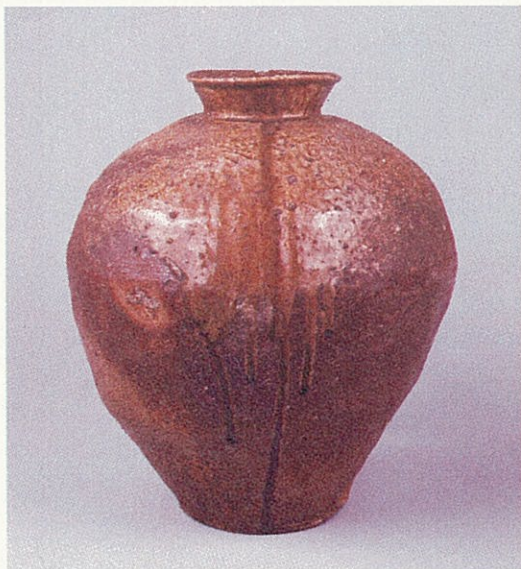
扁円俵形をした胴部に細長い口頸部を有する長頸瓶あるいは細頸瓶と呼ばれる須恵器の瓶である。このような長頸瓶は古墳時代後期の6世紀後半に東日本の特色を示す新しい器種として東海地方で生み出され、古墳時代には多くは古墳への副葬品として用いられ、8世紀初めまで製作された。

胴部は壺形と同じく丸底で縦長に粘土紐を巻き上げ、上部の開口部に粘土板を貼り付けて閉塞した後に横に倒して俵形とし、その中央に孔を穿けて口頸部を接合する。胴の閉塞部側には篋削り調整を施し、胴中央には位置決めを兼ねた一条の沈線を、反対の端には二条の沈線を廻らすなど入念に製作されている。口頸部は細長く緩やかに外に開いて立ち上がり、口縁外側を突出させて口縁帯を作り出し、その下部に一条の凸帯を廻らせ二段口縁とする。灰白色の精良な胎土を用い口頸部から胴部には淡緑色から緑褐色の自然釉が掛かり、一部は縞状に流れ、見事な焼成を示している。

本長頸瓶は東海地方でも岐阜県各務原市を中心に展開した美濃須衛窯で7世紀前半に製作されたものと考えられる。

1 1 しがらきしぜんゆうだいこ  
信楽自然釉大壺

一口



室町時代初期（14世紀末～15世紀初め）

高さ 44.0cm

口径 15.2cm

胴径 39.0cm

底径 17.0cm

信楽の大型の壺で、長石粒が器面全体に溶けて多く吹き出し、器表は赤褐色から暗褐色を呈し、胴の一方には淡緑褐色の自然釉が掛かり一部は縞状に胴下半まで流れ、信楽の特色をよく示している。胴部は粘土紐造りとして、大きく裾・胴・肩の三段に積み上げ、肩はさらに三段に細かく積み上げる。肩には粗い篋削り調整を施し、底は底部に比較して小さな平底とする。胴下部は鉢形に直線的にすぼまり、肩から胴は丸く強く張り、口頸部は比較的小さくやや外に開いて立ち上がり、口縁外側を突出させて仕上げ、胴部の口頸部立ち上がり際はわずかに平らに仕上げる。

素朴ながら堂々とした姿を有する室町時代初期に製作された代表作である。



1 2 おりべまつもんよほうひらざら  
織部松文四方平皿

一枚

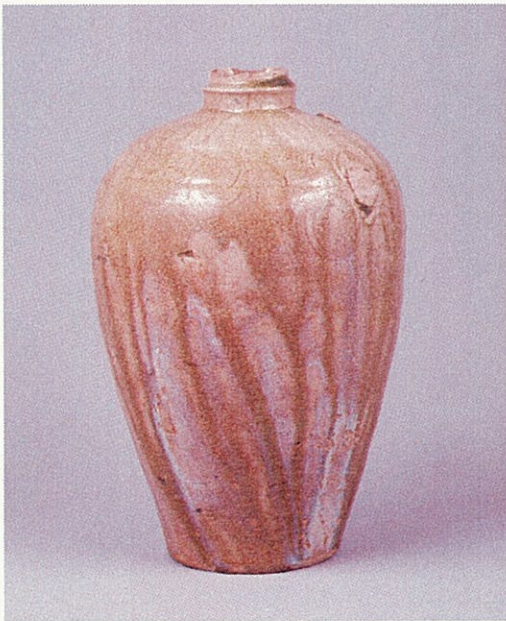


桃山時代（17世紀）  
高さ 4.6cm  
口径 19.8cm×19.9cm

織部を代表する器形の一つである方形の平皿（鉢）で、粘土板を内型に被せ成形する。内面底部には四角形に極浅い凹線を廻らす。底の四隅には対角線上に粘土紐を用いた小さな丸い脚をつけ、外面底部には荒い篋削り調整が施される。体部の対角線両角には銅緑釉を流し掛け、その余白には鉄絵具で文様を描き、全体に長石釉を掛けるが外面底部中央は露胎とするが、内面に流し掛けた銅緑釉の際は還元により辰砂色を呈する。

文様は単純ではあるが伸びやかで自由に、内面には若松風の松文を描き、一方の端には鉄絵具で雲を配し、外側面には網干文を描く。

織部ならではの銅緑釉も自在に流し掛けられて色鮮やかに発色した四方平皿を代表する作品の一つである。



鎌倉時代（14世紀）

高さ 26.8cm

口径 4.2cm

胴径 16.2cm

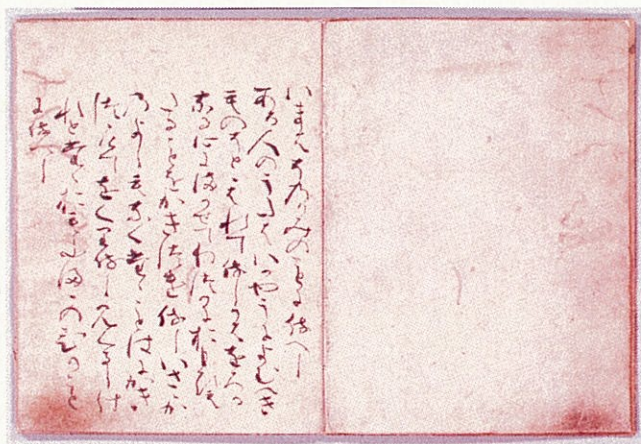
底径 9.6cm

粘土紐輪積造りの後、轆轤調整した胴部に小さな口頸部をつけたいわゆる梅瓶形の瓶子である。胴部は肩に丸みを持ち、裾に向かって直線的にすぼまり底は平底とする。口頸部はやや小さく、短く立ち上がり中程に凸帯を一条廻らす。胴部全体に篋削り調整を施す。外面全体に厚く淡緑色を呈する灰釉を施すが、濃淡を作り出して縞状に流下し、一部は青白色に発色する。文様は印花で施し、肩上端には三重蓮弁文を、肩の六方にはやや小さな菊花文を、三方には三箇の巴文を組みあわせ、その間の三方には一箇の巴文を、胴の中程には不規則に巴文を、それぞれ配する。

堂々とした姿に文様も比較的くっきりと表れた鎌倉時代に製作された瓶子の典型的な作行を示している。

【書跡】

- 1 4 <sup>きんだいしゅうか</sup>近代秀歌 藤原定家筆 一帖  
冷泉為秀、今川貞世、近衛前久ノ奥書アリ



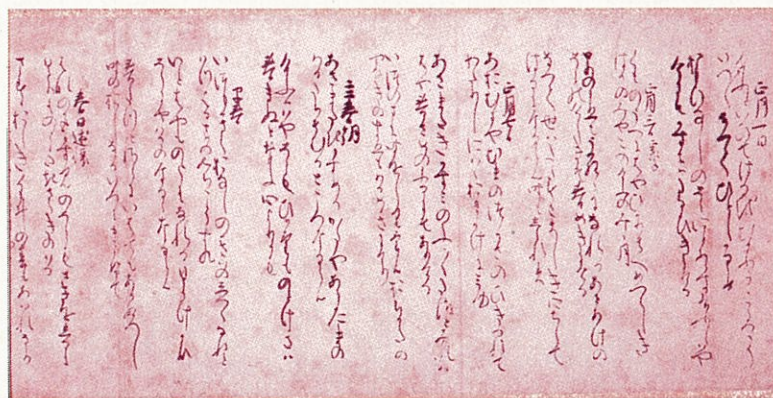
重要文化財（昭和13年7月4日指定）  
鎌倉時代  
縦 20.6cm  
横 15.2cm

『近代秀歌』は、承元3年（1209）に藤原定家（1162～1241）が自身の歌論と近代の秀歌とを書写して、源実朝（1192～1219）に贈った書簡体の歌論書である。

巻末には曾孫冷泉為秀（？～1372）および為秀の教えを受けた今川貞世（1326～1420）のほか、近衛前久（1536～1612）の識語があり、古来定家の書蹟としてすこぶる珍重されたものであることが知られる。

本書は定家の歌論をみる上にははなはだ重要な史料であり、併せて定家自筆本として国文学上に極めて価値が高い。

- 1 5 <sup>ふしみてんのうしんかんごえいぞう</sup>伏見天皇宸翰御詠草 百首 一卷  
(広沢切)



重要文化財（昭和30年2月2日指定）  
鎌倉時代  
縦 30.0cm  
全長 1003.0cm

広沢切は、伏見天皇（1265～1317）が平生の御製を春・夏・秋・冬・恋・雑の部別に宸筆で書写された歌集草稿の残巻で、諸家に分蔵され、世に珍重されている。

本巻は春部の草稿で、春の部の正月1日より春暮に至る58題、歌数100首を10紙に収めている。

本巻は伏見天皇の御詠草の草稿として広沢切の原形のまま伝世している一連の卷子本の1本として極めて価値が高く、また鎌倉時代の華麗で典雅な和様書法を示す仮名の代表的遺品として名高い優品である。

延喜十三年三月十三日



重要文化財（昭和16年7月3日指定）

平安時代

縦 26.5cm

全長 458.0cm

亭子院歌合は延喜13年（913）3月13日、宇多法皇（867～931）が亭子院で催した歌合で、『類聚歌合』（20巻本）の巻第3に収められている。亭子院は宇多法皇の後院で、皇后藤原温子（872～890）が住していた。

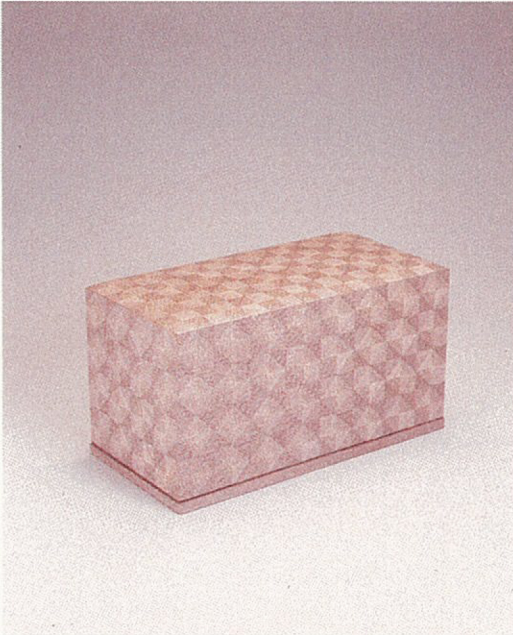
歌人は宇多法皇、伊勢、紀貫之等8人で、判者は宇多法皇で、簡単な判詞がある。判詞は今日知りうる歌合判詞の最初のものとして極めて重要である。

亭子院歌合は最初の本格的な晴儀歌合として注目される。

【無形文化財工芸技術資料】

17 神代杉木画箱

一点

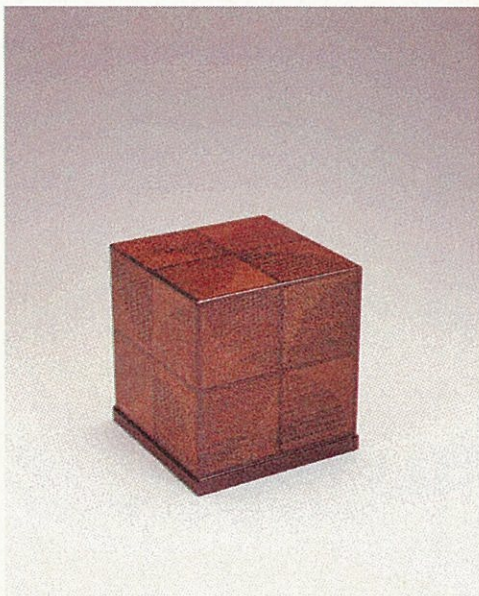


なかがわ きよつぐ  
中川 清司 作  
(重要無形文化財「木工芸」保持者)  
平成 20 年 (2008)  
第 55 回日本伝統工芸展出品作品  
高さ 17.6cm  
縦 32.0cm  
横 16.0cm

さしもの  
指物技法による台合せ造の木画の箱。懸子が付属する。

神代杉の<sup>じんたいすぎ</sup> 柁目材を 3 ミリ厚に切り、木目を組み合わせて貼り合わせ、さらに菱形（正方形）の木画部材を切り出す。部材の木目の濃淡を交互に配して正確に貼り合わせ、5 枚の木画板を作る。木画板を神代杉の板で裏打ちした後、天板の裏面を<sup>まめがんな</sup> 豆匏とヤリガンナで削り、蓋を組み立てた後、天板をセンで削り甲盛を作る。身を組み立て、蓋の口縁に<sup>くろがき</sup> 黒柿の薄板を貼る。サンドペーパー、木賊、砥石で研磨した後、いぼた蠟で拭き込み、仕上げる。

重要無形文化財「木工芸」保持者の優秀作品であり、工芸技術記録映画「木工芸—中川清司のわざ—」の対象作品としても貴重である。



にった きうん 新田 紀雲 作

平成 20 年 (2008)

第 55 回日本伝統工芸展文部科学大臣賞受賞作品

高さ 17.6cm

縦 16.4cm

横 16.4cm

したん まさめ つげ こくたん ぞうがん からきさしもの  
紫檀の柾目材に黄楊と黒檀の細線を象嵌した台合せ造の飾箱。唐木指物技法によるもので、組手は留形隠蟻組。懸子が付属する。

各面に 4 つの角丸の正方形を配して黒檀の細線で縁取りし、正方形の中に黄楊の細線を長短交互に並べることでゆるやかな曲線を表現した。文様は、フィンランドに赴いて見たオーロラとそのイメージを表現したものという。

小刀の刃先を常に研ぎながら、刃の裏側にできるかえり刃で紫檀地を彫り込み、幅 1 ミリ、厚さ 0.3 ミリの黄楊、厚さ 0.5 ミリの黒檀の細線を象嵌する。表面は拭き漆を 10 回重ねて仕上げ、内面は約 0.5 ミリ厚の花欄材を貼り、棕の葉磨き仕上げとする。

第 55 回日本伝統工芸展における優秀作品である。